

夏の永遠のおもひで

田中 駿希

今年の夏、私は中高からの親友、私を含める6人で山口県の角島へキャンプに行った。友達の一
人の親戚が持つ別荘を借りることができ、そこで2泊することになった。大好きな友達と、別荘で
2泊、バーベキュー、角島で海水浴、花火。キャンプに行く前からすでにワクワクだった。楽しい旅
行になるに違いない。こんなに楽しみなことにワクワクする気持ちは高校のときの修学旅行以来だっ
た。その時も当日が近づくとつれて楽しみが増していき、常に頭から離れずいてもたってもいられな
かった。あれから4年後、今回もそれと同じような気持ちが味わえることができたのだ。

角島に着くまではかなりの時間がかかった。というのも、別荘先の住所があいまいであり、以前
行ったことがある友達の記憶を辿りながら目的地を目指すしか方法がなかったのである。やっとの思
いで辿り着いた先は誰も住む人がいないような静かな山奥だった。そこから見える海の景色は絶景で
あり、別荘も大きく、外には広い庭もあり、この時点で私は満足感で満たされていた。まるで、私た
ち6人だけの世界にいるようだった。これで晴れていたなら、どれだけ素晴らしかっただろう……。

1日目は着いた時間も遅く、バーベキューをすることにした。自分たちで買い、自分たちで焼く肉
の味は格別だった。このときはなぜかいつもよりお酒がおいしく感じた。2日目は待ちに待った海！
が、しかし私たちが最も心配していた雨がこの日に限って降ってしまった。それでも関係ないといわ
んばかりに私たちは海に向かって車を走らせた。私たちは雨に濡れながら、少年の頃に帰ったように
遊んだ。とても楽しかった。とても楽しかったのだが、とにかく寒かった。さすがに心は少年の頃に
戻っていても、体はついていかなかった。私たちは寒さと雨による多少のストレスにより、1時間ば
かりで冷たい海を跡にした。そして、雨の中角島を散策した後、別荘に帰ってカレーをつくった。今
でも忘れることができない、冷えた体にしみるおいしいカレーだった。その夜にはドンキホーテで大
量に買っておいた花火をして、馬鹿騒ぎをした。打ち上げ花火にロケット花火に手持ち花火、いろん
な花火がたくさんあったがそれも一瞬で終わってしまった。私たちの最後の夜は終わってしまった。
楽しい時間は一瞬で過ぎ去ってしまうのはなぜだろう。

次の日の朝は友達の親戚になし狩りに連れて行ってもらい、お土産として大量の梨をもらって帰っ
た。これで私たちの2泊3日のキャンプは終わりだが、ここには書ききれないほどの楽しい思い出が
そこにはあった。

今回借りた別荘は、普段から一般の人たちにも貸し出しを行っているようであり、旅行で来た家族
などにコテージとして利用されているものであった。別荘の部屋の中には今までの宿泊客がつづる思
い出ノートのようなものが置いてあった。そのノートにははるばる東京から来た家族、夫の誕生日祝
いとして来た夫婦など様々な人たちがそのノートを利用して、角島で食べた新鮮なお魚、近く
にある有名な温泉など、見ただけで幸せになるようなことがたくさん書かれていた。私たちもこ
の楽しく、幸せな思い出をここに残したいと思い、6人全員が今回のキャンプの思いをそれぞれノー
トに書き込んだ。いつか、何年後、何十年後かにまたこの別荘に来て、6人みんなノートを見返し
て、こんなこともあったのうと思い出にふけりたいものである。そのときには6人の子供たちもそこ
にはいるのかもしれない。

夜とプールとわたしたち

山田 ひと美

このうえなく楽しい思い出、わたしにとってそれは仲のいい友人と過ごした時間のなかにある。それは友人がふと言い出した突飛なアイデアが作りだした忘れがたい時間で、わたしを夢中にさせてくれたのだった。

3月のオーストラリア、夜の10時頃。夜を迎えた川のそばでは昼間の夏の暑さが嘘のように少しひんやりとした風がゆるく頬をなでていた。夕飯を食べ終えた友人とわたしは帰路につくかどうか考えあぐねていた。ならばとりあえずとバス停の方向に歩きだそうとしたとき、視界に入った屋外プールを見て友人があることを提案した。「入ろう。」もちろん着替えやタオルなど持っていなかったが、そんなことはどうでもよかった。すぐさまプールへかけよりながら、「いいね、わたしも入りたいと思ってたんだ、そうだよ、夏だしね、」などとくちぐちに言いあいながらパンツの裾をたくしあげた。そしてプールのはしに手をかけるととたんに無口になって、慎重に足先を水中へと沈めた。ほどよく冷たく、肌に心地よかった。

水面にうつる灯りはわたしたちの動きにあわせてゆるゆると揺れ、勢いよく足を動かすと大きな音とともにその光はちぎれ、そしてすぐに戻った。その幻想的な様子を眺めながら水中に全身をあずけると、奇妙なほどみちたりた気分になった。時がとまったかのようなゆるやかな幸福感を味わい、水から顔を出すと同じくずぶ濡れの友人と目があった。わたしたちはお互いを見つめあいながら笑い出してしまった。楽しい。それだけだった。近くには誰もおらず、わたしたちのいるところだけが世界から切りとられたかのようにくっきりとした鮮やかさに満ちていた。夜をひとり占めしているかのようだった。

終バスの時間が迫っていた。あとほんの少しでいいからこの幸せを味わっていたいと思いながらわたしたちはプールをあとにした。肌にまとわりつく濡れた服の感触は、雨の日と同じはずなのに、全く違って感じられた。

「馬鹿なことをしたね、でも本当に楽しかったね」と、帰り道はそればかりだった。楽しさの余韻は服からしたたる水滴やかすかにただよう消毒のにおいとなって、わたしたちのまわりにずっと残っていた。

水面に映ったいびつな灯り、しんとした空気に湧いていたわたしたちの笑い声、あの水の温度。不思議な夜の中でわたしたちはこどものようにはしゃぎ、夢中になって水をかけ合った。あの奇妙で、ゆるやかな幸福感はいつでもありありと思い出すことができ、そして思い出すたびそれはどんどん色濃くなってゆき、わたしをたまらなく幸せな気分させてくれるのだ。



Sweet memory 

by K.H